

ノマド型ルールメイキング

弁護士 伊藤 毅
いたしろう たけり



上野にある東京国立博物館東洋館のコンセプトは、「東洋美術をめぐる旅」である。らせん状に配置されたフロアをさまよいながら、中国の陶磁器、エジプトの剣、インドの彫刻など、ユーラシア大陸の様々な地域から集められた美術品と文化に触れる。そうすると訪れる者は時間をさかのぼり、歴史の渦へと飲み込まれていく。各地域をつなぐのは、20世紀初頭にシルクロードを3度にわたって調査した大谷探検隊による展示である。これらの展示品を通じて、シルクロードの広大さと異文化間交流の重要性を肌で感じることができる。

この広大なシルクロードを統一する遊牧民の国家が13世紀初頭に突如として現れる。モンゴル帝国はマルコ・ポーロによっても記録され、シルクロード

していくが、この手本となったのはモンゴル帝国の重商主義だったともいえる。

モンゴル帝国の王族たちは、ムスリム商人にオルトク(仲間の意味)と呼ばれる特権を与え、共同出資により会社類似の形態で西域の物資の買い付けを行わせた。オルトクは、後のイギリス・オランダによる東インド会社の前駆体のようなルールであった。

モンゴル帝国のノマド型ルールメイキングは、大胆なオープン戦略によって、各地域の自主性を活かした分散型の経済システムを作り出していた。

モンゴル帝国の領内では、駅伝制度が整備されるところにも、他の国では一般的であった関税や通行税が撤廃され、その結果、広大なユーラシア全域で自

を通じた貿易と文化交流をさらに活発化させた。

その後、モンゴル帝国はわずか200年で衰退するが、その遺産は現代も様々な形で残っている。遊牧民を意味する「ノマド」という言葉もその一つ。デジタルプラットフォームを活用しながら、場所に縛られることなく自由に働くノマドワーカーは、現代の遊牧民である。とかく野蛮さが強調されがちなモンゴル帝国だが、実際は極めて洗練されたノマド型ルールメイキング国家であった。遊牧民であるモンゴル人は持たざる経営を基本とし、王族はユーラシア大陸の大半を征服した後も、しばらくの間テント暮らしを好んだ。彼らは、アセットよりもルールに重きを置いた国家運営を行っていた。

ヨーロッパの国々は16世紀頃から重商主義に傾倒

由で開かれた商取引が可能となっていた。税制度も、経済活動の障害にならない部分に絞った課税が行われ、塩の専売による税収が8割以上を占めていた。

通貨システムも商業の促進に一役買った。モンゴル帝国の第5代ハン(皇帝)であるフビライは、塩の引換券としての高額紙幣や、財物との交換を前提としない不兌換の少額紙幣を発行した。マルコ・ポーロの東方見聞録には、「紙幣の受け取りを拒否したものは死刑となる」と、驚きをもって語られている。

抑えるべき点を最小限保持しつつ、大胆な自由化を進めるノマド型ルールメイキングは、デジタルプラットフォームを活用する現代のルールメイキングにおいても参考になる点が少なくない。

ノマド型ルールメイキングは、大きなプラットフォームの中で人々の自由な活動を促し、経済活動の規模を大きくするという点で大きなメリットがあるが、運用を誤った場合はその弊害も大きい。こうした事態を回避するため、ルールの内容も含めた不断のメンテナンスが必要となる。ユーラシアを商業大陸に変えたモンゴル帝国は、現地化により次第に各地域で変容するとともに、権力者による不正も起これり衰退していく。

遊牧民たちによるルールベースの国家戦略は、大航海時代のヨーロッパに引き継がれていき、ルールメンテナンスに最もたけた英国が覇権を握ることになる。

時の調べ Essay

略歴
1971年生まれ。フレックスコンサルティング代表取締役。弁護士。早稲田大学大学院法学研究科修士課程(商法専攻)修了。ルール・財務・アーキテクチャを統合した構造改革やプラットフォーム構築支援に強みを持つフレックスコンサルティングを創設。民間企業の戦略立案支援のほか、国の政策立案支援にも多数従事している。
著書に「ルールの世界史」(日本経済新聞出版、2022年)。

写真: 東京国立博物館
開館時間: 9時30分~17時
休館日: 月曜日
詳細は <https://www.tnm.jp> 参照